

東京都美術館インタードキュメンテーション01

	あいうえのものがたり 国立科学博物館編
テーマ	石と博物館（ディスプレイすること）
日時	2014年6月29日（日）
場所	東京都美術館→国立科学博物館→上野公園→東京都美術館
時間	10:00～14:00
参加者	子ども10名+アートコミュニケーター10名+視察数名

タイムライン

- 9:10 事前打ち合わせ
 9:45 受付開始、アイスブレイク
 10:00 導入（絵本『キュッパのはくぶつかん』読み聞かせ）
 10:35 東京都美術館出発
 10:45 石を見る @国立科学博物館
 11:15 石を拾う @上野公園
 11:45 東京都美術館到着
 12:00 昼食
 12:30 ストーンコレクションづくり
 13:35 ストーンコレクションの共有
 14:00 終了
 ～15:00 事後振り返り

材料

- 石拾い用カゴ
 木箱
 グルーガン
 ポストカード
 のり はさみ カ
 ラーペン
 ブックセット

活動のねらい

- ① 色・形・質感に注目しながら一つ一つをよく見る。
- ② 自分の気になるモノを集める。
- ③ 集めたモノを自分の規則でディスプレイする。

はじめに

この日の「あいうえのものがたり」は、「石」をめぐるさまざまな活動をしました。

絵本『キュッパのはくぶつかん』（オーシル・カンスタ・ヨンセン著）がこども達をミュージアム：国立科学博物館へいざないました。

そして、博物館の石や公園の石、自分で集めた石など、たくさんの石とかかわり、最後には自分で拾った石を自分でディスプレイしてコレクションボックスを作りました。

●

もくじ

はじめに

石と仲良くなろうーアイクブレイク

ディスプレイを知ろうー導入～国立科学博物館

石をじっくり見よう、感じようー国立科学博物館～上野公園

自分の規則で並べようーストーンコレクションづくり

石をめぐるいろいろな活動をして

みんなのまなざし

●

＊石と仲良くなるうーアイスブレイク＊



◎ども「サファイヤってありますか？」◎びラー「なんでサファイヤがいいの？」◎「きれいだから好き。」



◎「これは彫刻に使うんだよ」
◎「(石に開いた穴を見て) カスがもったいないね」

＊ディスプレイを知ろうー導入～国立科学博物館＊



自然物にまつわる物語、絵本『キュッパのはくづつかん』の読み聞かせ

◎「土コレクション…」



◎「青いのが好き」「(ある石を指して) でもこれは気持ち悪い」

◎「これはなんて名前だろう？」◎「これ(モニター)で調べられるよ」

＊石をじっくり見よう、感じようー国立科学博物館～上野公園＊



◎「うわあ！ボコボコってしてる！」 ◎「うしろもあるよ」 ◎「ほんとだ」「きもちいい」

◎「これ（石）は絶対落とさないぞ」

◎「石が石じゃないかわからないけど、石にしておこう」



◎「いい石なくなっちゃった」

◎「これすごい！白と青！！」

◎「小さいのと小さいのをくっつけてみようかな」

◎「見て！きれいな色集めた」



◎（石の柄を見せ合いながら）「これと同じー！」

◎「ほんとだあ。」

自分の規則で並べようストーンコレクションづくり



絵本『キュッパのはくぶつかん』の著者オーシルさんのコレクションボックスを開けると・・・

㊦『うわあー！！』

㊦ (箱をかいで)「木のおいがするー」

㊦ (グルーガンで石を箱に固定していない子どもに対して)「止めないとぐちゃぐちゃになっちゃうよ？」

㊦「そしたらまた大きいの順に並べればいいんだよ」

㊦「こどもは発想が早いなあ。すぐ決まってる。」



㊦「こけがきれい」 ㊦「それ、素敵な言葉だね」

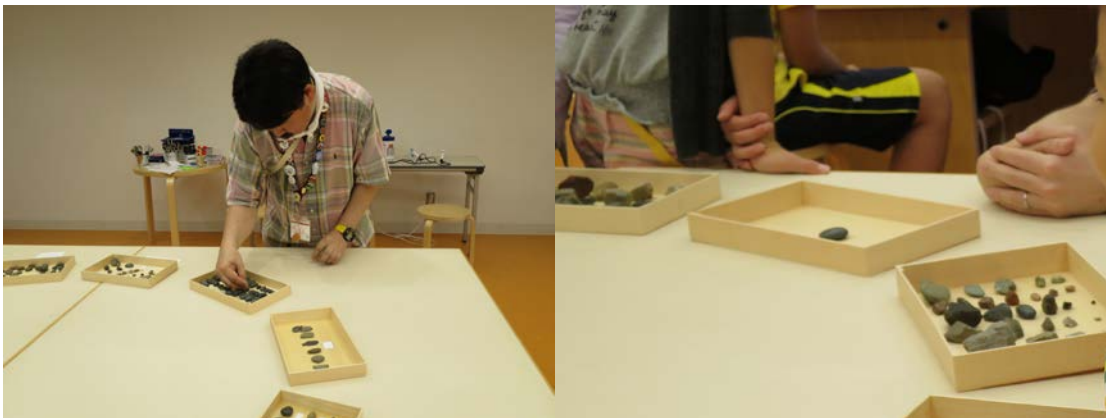
＊みんなの規則をみてみようーストーンコレクションの共有＊



㊤「似ている石どうしを集めました」

㊤「おすすめポイントは？」 ㊤「特にはないです」

㊤「これさわっていい？」



㊤「黒くてつるつるしている石を集めました」

あるとびラーがつくった、
ひとつの石だけを置いたコレクションボックスをみて、
笑い、驚く、こどもたちと大人たち…。

石をめぐるいろいろな活動をして

石をじっくり見る、感じる、選ぶ、集める、並べるという活動をしました。

石としっかりかかわることで、
地面から出ている新芽やふかふかの土にも気づくことができました。

自分の規則でやったからこそ、
友達やとびラーがどのように並べているのか、
興味をもって知ることができました。
思わず触ってみたくなりました。

見た事や感じた事を言葉にすることで、
「いいね」「すてき」と
まわりの人たちに肯定してもらえました。
言葉にしなくても、自分の中で「これいいな」に出会うことができました。

ひとりの時間も、ふたりの時間も、みんなの時間も、
ものやひとと触れ合い続けて。
心をうごかし続けて。

学校では学べない、
自分の中からの気づきや興味を得ることができた、
そんな日曜日。

*みんなのまなざし (今後へつなげるふりかえり) *

㊦ども

自分の中にある、「すき」「きらい」を言葉や態度、作品（コレクションボックス）に表していた。友達がなくて不安そうな様子は見られなかった。「新しい友達ができ嬉しかった。」と感想シートにも書いていることから、自分で友達を作ろうとする様子も見られた。とびラーも、こどもたちの心のよりどころとなっている様子だった。

*

国立科学博物館でスケッチをする必要はあったのだろうか？書く（描く）ことで認識を強くすることはできるが、スケッチすることに苦手意識を持つこどももいた。

一方でスケッチがきっかけとなって石をじっくり見ているこどももいたので、こどもによって差が見られた。

㊦びラー

「こども同士のコミュニケーションが見られた。」という感想からわかるように、こどものことをよく見て、見守っていた。そして、こどもとのエピソードをよく覚えていた。

また、自分たちのコレクションボックス作りにも真摯に向かっていた。こどもと同時に制作をするので、過度な関わりはなく自然にこどもと接していた。

*

「え、私たちも撮るの？」と、とびラー自身のコレクションボックスの撮影に少し抵抗が見られた。こどもを尊重するあまりに、とびラー自身が自分をあとまわしにしているのではないだろうか。

㊦たし

こどもを主に見て、言葉を聞き取ろうとした。こどものさまざまな行動を面白いと感じた。記録をしていると、なかなかこどもたちと直にコミュニケーションがとれないが、こどもやとびラーのいろいろな言葉や場面に出会うことができた。こどもは、「鑑賞しますよ」と声かけしなくても自ら鑑賞を始めていた。

*

今回のあいうえのものがたりの目標がはっきりとはわからなかった。あとから「身の回りにあるものを見ること、そして気づくこと」というあいうえのものがたりの目標を達成するためのひとつのプログラムであることを知った。

㊦ごしや

保護者へのプログラムの要旨はどこまでされているのだろうか？

こどもの参加を勧めたのは保護者であるが、最終的にこどもが作ったものを見るだけであり、プログラムの価値であるこどもの気づきのプロセスは伝えられない。我が子がどんなことに感動したのか、どんなことがあったのか保護者は知りたいに違いない。

*

とびラーから保護者へ、こどもひとりひとりのエピソードを伝える機会があってもよいのではないだろうか。保護者との共通理解も図りたいと思った。